月々のことば

《もくじ》

表紙のことば……安藤　光慈　3
1月のことば……安藤　光慈　17
2月のことば……安藤　光慈　29
3月のことば……安藤　光慈　41
4月のことば……村上　泰順　53
5月のことば……村上　泰順　67
6月のことば……村上　泰順　81
7月のことば……波北　顕　95
8月のことば……波北　顕　107
9月のことば……波北　顕　119
10月のことば……清岡　隆文　131
11月のことば……清岡　隆文　145
12月のことば……清岡　隆文　159
あとがき……174

表紙のことば

念仏は
まことなき人生の
まことを見せしむる光

正親 含英『真宗読本』

「散歩日和」 山梨県 河口湖 富士山

*聖教の引用については、
『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』は『註釈版聖典』
『浄土真宗聖典（七祖篇）註釈版』は『註釈版聖典（七祖篇）』
と略記しています。

The nenbutsu is the light which shows us the truth of our untrue lives.

はじめに

表紙のことばは正親含英師の言葉です。師は、一八九五（明治二十八）年十一月十六日に姫路市に生まれ、真宗大谷大学（現・大谷大学）研究科を卒業後、真宗大谷大学の教授となられました。また、一九五八（昭和三十三）年から一九六一（昭和三十六）年まで大谷大学の学長を務められました。一九六九（昭和四十四）年十二月二十八日に往生されたのですが、生前に親交のあった金子大栄師からは「本当に救われる道があるということを話しあうことができるのは、あるいはあの人だけではなかったかということも思われる」といわしめるほど、お念仏のご法義に真摯に向き合った方ともいわれています。

この表紙のことばは、師の書かれた『真宗読本』（法藏館）の第三章に、

生も死も容易でない。吉凶禍福、さまざまに織りなされてゆく人生は、そのまま仏教にいわゆる六道輪廻（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六の境界をへめぐること）の絵図そのままではないか。けれど、こうして、どうにもならないものが、どうにもならぬままに度されてゆく法がある。それが念仏である。この智慧の念仏は、まことなき人生のまことを見せしむる光であり、一つ一つ苦悩の経験において、一つ一つの寂かなる、まことのよろこびを見るのである。

（九六頁）

とあるところから採られています。この章では、私たちの人生をご本願のはたらきのなかに歩む横超の道であると説かれており、そのなか、私たちの人生を横超の道として成り立たせるものこそお念仏なのだ、と明らかにされています。その鍵となるのが、この「（智慧の）念仏は、まことなき人生のまことを見せしむる光（であり）」という言葉だと思います。

まことなき人生

さて、私たちが「まこと」と訓じる漢字には、ぱっと思い浮かぶだけでも「真」「誠」「実」などがあります。「信」も「まこと」と読むときがありますね。他にもいろいろあるようですが、漢字で考えると、「真」の基本的な対義語は「偽」、「誠」の対義語は「嘘」、「実」の対義語は「虚」、そして「信」の対義語は「疑」となりますから、同じ「まこと」でもそれぞれにニュアンスが異なっているようです。「まことなき人生」といわれる「まこと」には、どの漢字が当てはまるのでしょう。

あえていうなら、「実」ではないかと思います。師のいわれるとおり、私たちの人生は「吉凶禍福、さまざまに織りなされて」いきます。よろこびも楽しみもあり（吉・福）、悲しみも苦しみもある（凶・禍）人生です。しかしながら、そのよろこびや楽しみがいつまでも続くわけではなく、地震や水害などにも遭い、悲しみや苦しみを逃れることはできません。そのことを、含英師は「いわゆる六道輪廻（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六の境界をへめぐること）の絵図そのままではないか」といわれるのであり、そうした吉凶禍福に迷うだけであれば、それは実ならざる虚ろな人生といわねばなりません。このような世界を、師は「苦悩の土」とよんでおられるのでした。

昨年は、新型コロナウイルスの感染拡大にともない、重症化して苦しんだ人、命を亡くされた人、そしてその周りで心配し悲しむ人々……、私たちもまた、いつ感染してしまうかわからずに、漠然とした不安を抱えて日々を過ごしていました。まさに人生は諸行無常であり、何が起きてもおかしくないと実感した一年でした。諸行無常、それは、東日本を襲った震災のときにも思い知らされたことでした。こうした大きな災害や事件だけではなく、私たちの周りには世の無常を思い知る出来事で満ち満ちています。

しかし、この世は無常、本当にそれだけでよいのでしょうか。

諸行無常ということを考えるとき、すぐに思い浮かぶのは鴨長明の『方丈記』ではないでしょうか。『方丈記』は、